

悼むところを聴かせて

端占美也 はじめみっや

—

自分は、社会の秩序と正義を強く願っている者です。このたびの瑞鳳高校での忌まわしい出来事について、お伝えしたいことがあってペンをとりました。

もう、ひと月ほど前になりましたでしょうか。はじめて瑞鳳高校を訪問したとき、伝統校らしい明るく健康的な空気のなかで、ただ一点、その場に相応しくない不穏なものに気づいたのです。そこで自分は、職業カメラマンのはしくれとして、いつか決定的な瞬間を見届けてやろうと準備して、観察を続けていたのです。

そして先の金曜日、ついに恐ろしい現場を目撃する機会を得ました。同封の写真がそのときのもので。説明するまでもなく、単純な事故とか間違いで済まされる問題でないことは、お分かりいただけるものと存じます。ことが重大なため、どのようにすべきか悩みました。学校に知らせるべきなのか、あるいはマスコミの手に委ねるべきなのか。いろいろと考えましたが、やはり、そちらに相談させていただくのが宜しかろうと結論しました。

この情報はお役に立ちませんか？ ご関心があれば、〇九〇—四●●●—九●●●までご連絡ください。そのときに具体的な話をしましょう。

成瀬俊吾

「で、これがなに？」

警視庁の偉い人に呼ばれて行ってみたら、いきなりそんな手紙だもの。自分を偽ることなく素直に首をかしげて見せてあげた。

わたしは定職のない修業中の心理カウンセラー——警察の人間なんかではない。この偉い小父さまは、まあ、ちよつとした知り合いというか、身内みたいなものだ。

「だって、里子ちゃんは瑞鳳の卒業生じゃないか。関心あるだろ？」

紙はありふれたレポート用紙で、均等な中で三つ折りにされている。青いボールペンで書いた文字には独特な癖があって、容易に書き手を特定できそうだった。

「触ってもいいの？」

「もちろん。封筒もあるよ」事務用のクラフト封筒には、「警視庁殺人課御中」などとデタラメな部署名を印字した宛名シールが貼ってあり、差出人の名前はなかった。消印はおとといだ。

「同封の写真というのがこれだ」

懐かしい制服の高校生が写っていた。髪が短く眉のくっきりとした少女が、ふざけあうようにして、眼鏡をかけた少年の左腕にしがみついている。きょう日、これくらいなんでもない。二人ともきちんとした身だしなみで、真面目そうだった。

「その女の子が、先週の金曜日に死んだんだ」

「新聞で見た。飛びおり自殺したんでしょう？」

「羽鳥雅子はとりまさこという生徒だ。その子が校舎の屋上から落ちたことは間違いないんだ。手すりのかどにスカートが引っかかって綻びた跡があったし、倒れていた場所も自然だった。し

かし、この手紙だ——気になるじゃないか、なあ？」

わたしは答えなかった。もったいぶった話しかたをする人ほど、相手に先読みされることを嫌がるものだ。

「その日は行事の都合で、午後三時が生徒の最終下校に指定されていた。ところが羽鳥雅子は、家族が夕方まで不在で家に入れない、鍵も持っていないからと訴えて、特別に許可をもらって学校に残っていたんだ。美術部のメンバーでな、四時半までは、クラブの友だちと一緒に絵を描いていた」

「うん？」

「四時半というのはその子が帰った時刻で、そのあと、羽鳥雅子の生きてる姿を見た者はいない。七時すぎになって、校内を見まわっていた事務職員が、校舎裏の遊歩道に倒れていた彼女を見つけた。死後いくらか経っていなかった——あとで分かったことだがね。そのとき学校には、ほかに、クラス担任の先生と美術の先生が残っていて、その日のうちに昼間のいきさつを聞いたんだが、四時半から七時までの彼女の行動は分からなかった。五時すぎに職員が校内を見まわったときには、どこにもいなかった。一方で、自宅の玄関先で通学バッグが見つかった。彼女の家は豪徳寺で、小田急線なら一駅なんだが、日頃から、片道三、四十分かけて徒歩通学していた。彼女は早い時間に、一度、家に帰って来たのかもしれない。戻ってはみたものの、やはり家のなかに入らなかったので、荷物だけ置いて——」

「学校に引き返して死んだ？ へんだよ」

「そこは分からない。とにかく、学校と自宅の周辺でひととおりの聞き込みはやったんだが、四時半から七時までの間、誰も羽鳥雅子を見ていないんだ。その日の彼女は、落ち着かない様子だったらしい。絵を描いている最中には、日頃から仲のよかったはずの相手と激しい口論もしている。普通でなかったことはたしかで、なにかを苦にして発作的に自殺したのだろうという結論になったのだ」

「死体に不審な点はなかったの？」

「なかったんだらうよ、たぶん。知らんよ」

「たよりないじゃん」

「手紙が届いたのは葬式が終わったあとで、もう、死体はなかったんだ——分かってる、手ばかりだったかもしれない！ しかし、年間にどれだけの変死体が出ると思う？ 現実問題として、すべてを司法解剖に回すことなどできやしない。検視したうちの数パーセントがいいところさ。実見分で不審な点がなければ、事件性なしということで簡単に結論を出すことも多いんだ」

「あらあら」

気の毒に。それは失態じゃないの。

「それでこれから、この成瀬氏に会って話を聞こうというわけね。どんな人なのかしら」
「職業カメラマンと名乗っているが、そんな立派なものじゃない。もっぱら盗撮まがいの写真を撮っては低俗雑誌に売り込んだり、醜聞ネタであれば恐喝者に転じて金を搾りとりたりする、たちの悪い男なんだ。実際に摘発できたケースは二、三しかないが、そのかげでどれだけのことをやっているか。ひと月ほど前に云々と書いてあるが、実は、やつは、ある雑誌社から仕事をもらって、瑞鳳高校の文化祭の写真を撮りに行ってた。これはま

ともな仕事だったようだがね」

「でも、手紙で言ってきたのは、雅子さんが死んだ日のことでしょうか？　彼女が死ぬところを見ていたのかしら」

「ところが、それはなさそうなんだ。その日の成瀬は、五時前に狛江で事故を起こしている。物損で怪我はなかったが、車はお釈迦になってレッカー車で運ばれたし、そのあと迎えに来た仲間と飲みに行く話をしていたので、たぶん瑞鳳には行っていない」

「どっちにしても、送ってきた写真の意味がよく分からないね」
わたしは、もう一度その写真を手に取ってみた。

本人たちはカメラに気づいていない様子で、一種の盗撮かもしれないが、無邪気で微笑ましい高校生の日常にしか見えない。まさか、これが“恐ろしい現場”でもあるまい。

「それで、成瀬氏はなんだったって？」

「成瀬に会うのはちよつと面倒だったよ。携帯の番号は書いてあるけど、いくらかけても出やしない。交通課からの事故報告で住所が分かって、昨日の夕方には訪ねていったんだが留守だった。今朝になって、ようやく見つかったよ——」

彼は、聞き手が続きをせがむのを期待するように言葉を切ったが、わたしは、そんな魂胆が癪にさわったし、だいたい予測もできたので無視してやった。

「成瀬は、自宅近くの多摩川の岸辺で死んでいた。手紙を投函した日の晩に殺されたんだ。火曜日だな。堤防道からはずれた深い草むらのなかで、凶器は近くに捨ててあった廃材の鉄パイプだった。それから、やつ仲間を確認したところ、彼はいつでも小さなデジタルカメラを持ち歩いていたらしいが、それが見つからなかった。当然ながら、この写真のデータも見つかっていない」

「じゃあ、やっぱり自殺ではなくて、成瀬は、なにかを知っていて消されたの？」

「かもしれない。自殺した理由を教えてくださいにしちゃ、手が込んでるものね。この手紙の筆跡が、成瀬のものであることは確認できた」

「だから、小父さんのところが乗り出して、瑞鳳高校の事件を捜査しなすんだ」

「できるかよ、そんなことが」彼は言い放った。「もう、警察から自殺という所見を伝えて、遺族も学校の人もそのつもりで気持ちに整理をつけている。そんなところへ出かけていって、やっぱり殺されたのかもしれないよ、なんて言えるかい！　死体はないし、現場だって踏み荒らされて目茶苦茶さ。明白な根拠はない——妙な手紙をよこした成瀬が殺された以外にもない。迂闊に手を出せばマスコミが大喜びするだけだ。だからおまえを呼んだのに決まってるじゃないか」

「まさか、女子高生に変装して潜入捜査だなんて、馬鹿なこと考えてないよね？　たぶん無理だと思うよ。若く見られがちなのは自覚してるけど」

「くだらん。漫画じゃあるまいし、そういうのは変装じゃなくて変身というんだ」
そこまで言わなくてもいいのに。

小父さまは、なにかの書類を手元に引きよせながら、ちらりと上目づかいでわたしを見た。あぶない。これはなにか、よからぬことを企んでいる兆候だ。

「瑞鳳高校でな、スクールカウンセラーというのを募集している。専任の人がいないところに今度の事件で、学校でも対応に困っているんだろう。そこにおまえが行くんだ。この

あいだ、なんとかいう資格を取ったと言ってただろう？ まさにうってつけの役目だと思っただ。どうだ、うれしいだろう？」

自分の耳をうたがった。ロジャーズの必要にして十分な六つの条件が頭をよぎる。無条件の肯定的配慮、カウンセラーとしての自己一致……。

「カウンセラーって、悩みを聴いてあげる仕事だよ。受容と共感。自分から根掘り葉掘り質問して調べるなんて、できっこないよ」

「そんなことはしなくていい。無茶をされたらかえって困る。ただ、羽鳥雅子と近かった人たちの話にじっくりと耳を傾けてくれればいい。ただの自殺でなかったなら、隠された事実があるならば、きつとどこかに気配があるはずだ。それを教えてほしい。手応えがありそうだったら、そのときにはうちが本格的にやる。校長には内々に話してあるから、行けば即採用だ」

二

そんなわけで次の日、わたしは、臨床心理士でもない自分が「スクールカウンセラー」と呼ばれることに後ろめたさを感じながらも、生来の好奇心も手伝って、母校の相談室で、羽鳥雅子のクラス担任だった岩沼先生と話すことになった。

わたしが与えられた相談室は、羽鳥雅子が落ちたというC校舎の一階だったが、昔はこの校舎自体がなかった。数年前に、二棟の校舎が連絡通路をはさんでH型になっていたところに、右の縦棒をL字にするような配置でC校舎を新築したのだという。せまい用地を最大限に活用しようと考えたのか、四階建てでゆったりとした昔の校舎とは対照的に七階まであって、遠くから見ると、C校舎だけが異様に細く高くそびえて見えた。

わたしの記憶にあった岩沼先生は、まだ若くて、悪童たちが授業中に示し合わせて、いつせいに紙飛行機を飛ばしたりペンケースを落としたりすると適切に対応できず、瞳を潤ませて懇願するような素ぶりしかできない、ぱっとしない国語教師だった。しかし、その後には経験を重ねて自信をつけたのだろう。南国育ちの浅黒い顔がにっこりと笑うと、思わず引きこまれそうになる魅力を感じた。

「きみたちの学年には、ずいぶんといじめられたっけなあ」

てれ臭さもあるのだろうけど、最初の挨拶にしてはあんまりだと思っ。

「わたしが何度もみんなを叱りつけて、静かにさせたのをお忘れですか？」

「覚えてるよ。きみがすつくと立ち上がって睨むだけで教室がシーンとなる。凜々しかつたと思うね、えらきこ江良里子くん」

「それはどうも」

「羽鳥雅子は、きみにちよつと似たところがあったよ。ひかえめで仲間の先頭に立つタイプではないのに、本人も気づかないうちに、その言動が自然と仲間たちに影響をおよぼしていく、そんな不思議な力をもった生徒だった。だからこそ、私も含めてクラス全員がガツクリきている。きみのような人に来てもらえて、本当にありがたいと思ってるんだ」

「羽鳥さんが自殺したことについて、どう思われますか？」

「成績は抜群によかったし、みんなから好かれていた。原因がさっぱり分からなくてね」

「ええ」——カウンセリング技法の初歩中の初歩である単純受容。

「だから、学校の問題ではなかったと信じている。家のひとには気の毒だけど、家庭でなにかあったんじゃないかな」

「学校の問題ではなかったと信じてるのですね」これは「再陳述」——なんて書くといかめしいが、ようするにオウム返しだ。

なぜ前半だけを繰り返したかという、先生の口ぶりに学校の責任が気にかかっている様子が感じられて、そこに焦点をあてることが適切だと判断したからだ。後半に着目して追求するのは警察の事情聴取であって、わたしのやり方ではない。

「そりゃあね、あの日、彼女が遅くまで学校に残りたいと言ってきたのを、好きにしていと認めたのは私だったさ。でも、なぜそのときに不自然な様子に気づかなかったのか、もつとよく事情を聞いて目をはなすべきでなかったとか言われても、それは結果論というものでね」

「遅くまで残りたいという話を、先生は不自然に感じなかったのですね」

「うん。昼休みに彼女が私のところに来て、お母さんが夕方まで留守で、自分も鍵を持っていないので五時頃まで学校に残りたい、特別に認めてほしいというんだ。普段だったら駅前の図書館で勉強していけと言うんだが休館日だったし、私も、七時ごろまでは仕事で残るつもりでいたしね」

「無人の学校に残るわけではないから、問題ないと考えたんですね」

「そうだよ。彼女は、美術室で絵を描いて過ごすつもりだと話していた。二時に授業が終わったあとで、私が教室に入って終礼をすませた。五分くらいだったろう。そのあと、私がまだ教室で生徒と話しているうちに、彼女は荷物をまとめて出ていった。あの日にかぎって、他人を避けて一人になろうと急いでいるような感じがあつて、たしかに、ちよつと妙ではあつた。でも、それだけで自殺の兆候だったなんて言えないよね」

「一人になろうとして——一人、一人で美術室に行ったんですね」

「一人です？」

岩沼先生が怪訝そうな顔をしたので、一瞬、しまったと思ったが、先生は、強引なりードに反発することもなく、そのまま先を続けてくれた。

「いや、一人じゃなかった。同じクラスの迫静香はさましずかという子が、あとを追うようにして出ていって、結局、一緒に美術室で絵を描いていたらしい。私は迫くんが残ることは了解していなかったし、羽鳥くんも迷惑そうだったんだけど、迫くんがつきあうと言って、成りゆきでそうなったみたいだ。そのあとのことは、美術の細倉先生でないと分からないよ」

「死体を見つけたのは細倉先生？」

「事務の樫村さんだよ。七時ごろ、出入口を施錠する前の見まわりで、その遊歩道を歩いてきて」——先生は窓の外を指さした——「あずまやの近くに倒れているのを見つけたんだ。樫村さんが叫んだところに細倉先生が来合わせたけど、なにせ、私もあとで見ただけど、頭が割れて血まみれ……あたり一面にどろどろとしたものが飛び散って、吐き気を催すような臭いが漂っていたから、先生は、腰を抜かして動けなくなりました。それで樫村さんが、職員室に私を呼びに来たんだ。ほかには誰もいなかったし、樫村さんも、たぶん死んでる、生徒だと思うけど細倉先生もだめだ、などと要領を得ないことを口走るばかりだったから、とにかく案内してくれといって一緒に駆けつけたんだ。でも、七時だから、校舎内の明かりも消えていて外は真っ暗、状況も状況だったから、私も、なんとか

脈をとって死んでいることを確認するのが精一杯で、どこかに運んで介抱するなんて思いもよらなかつたし、そもそも、それが誰だかすら分らなかつたね。とにかく、ほかの先生や警察に連絡しなくてはと思つてね、樫村さんとその場に残つてもらつて、へたり込んでいた細倉先生を支えながら職員室にもどつて、手分けして方々に電話したのさ。それから、もう、てんやわんやの大騒ぎだった。警察の人が最初に到着したので私が案内して、そのときに強力なライトで照らして、顔をきれいにしてやつて、はじめて羽鳥くんが分かつたくらいだ。そのうちに、校長や教頭がやつて来て、職員室で放心状態になっていた細倉先生を怒鳴りつけるわ、私が警察の人と話しているところに割り込んで来て、私が悪かつたかのように責め立てるわ——」先生はちよつと声をつまらせた。

「パニック状態だったな、あれは。ちよつと堪らなかつた」

「先生からみて、羽鳥雅子さんは自殺するような生徒でしたか？」

「さあ、どうだろう」わたしには、先生が心なし躊躇したように感じられた。「羽鳥くんは、どんなときにも冷静なしつかりもので、同級生からもいろいろと相談されるが多かつた。でも、彼女自身は、自分のことを相談できる相手が学校にいたのだろうか——そう考えるとね、完全すぎる彼女の姿が痛々しく感じられたのも事実だよ。なかなか自分の素顔を表に出せないところがあつた。なにかあつても、こんなことを悩んでいると知られたら恥ずかしい、弱い人間だと思われたくない——そんな思考がはたらいて、結局、すべてを胸のうちにしまい込んで、苦しんだのではないかと思う。そんな彼女だったから、警察から自殺だろうと聞かされても、正直なところ意外ではなかつたし、ほかの先生方にとつても、それが一番分かりやすかつたんだ。細倉先生だけは、ぜつたいに彼女が自殺したはずはないと頑張つたけど、彼女は羽鳥くんの昨年の担任だつたし、まだ若いからね、気が動転してしまつて信じられなかつたんだろう」

わたしは、さらにいくつか岩沼先生とやりとりをして、隣のB校舎の三階に美術室があること、そのB校舎と平行に建っているA校舎の一階に事務室と職員室、二階に羽鳥雅子の所属した二年二組の教室があること、といった位置関係を頭のなかで整理した。

先生に案内されて来て、そのまま話し込んだが、この相談室でじつと待つていたからといって、すぐに誰かが訪ねてくるわけもない。とりあえず、ひさしぶりに校内を歩きまわつてみることにした。

三

C校舎にはエレベーターがあつた。七階までであると聞けばなるほどと思うが、駆け足で階段を上り下りしていた高校時代を思い出すと、どうも場違いに感じてしまう。

エレベーターは屋上階まで通じていて、降りたところは、三メートル四方ほどの雑具置場になつていた。校旗掲揚や懸垂幕のための器具、折りたたみ式の椅子テーブル、傷んだ書類キャビネットと更衣ロッカー、とても使えそうにない旧式のパソコンやオーディオ機器、未開封のままうずたかく積まれた何かの印刷物の包み、これらを運んだのであろう折りたたみ台車——すべてが薄汚れていて、校舎の新しさとは裏腹に古びた廃物の臭いがする。鋼線入りガラスのはまったドアを押して開けると、そこが屋上だった。

周囲に高層建物はなく、南西の方角には一直線に、二棟の旧校舎と羽根木公園、そして

小田急線の梅ヶ丘駅が望める。中学時代から六年間も通った場所なのに、わたしにとって初めての眺めだった。四階建ての旧校舎から見わたせた範囲はもっと狭かったし、なによりも、小田急線の高架がのどかな世田谷の風景を大きく変えてしまっていた。

C校舎の西側がグラウンド、反対側が羽鳥雅子が倒れていた樹林になる。彼女の身体が越えていったであろう東側の手すりから、見おろしてみた。校舎から数メートル離れたところに五角形をしたあずまやの屋根があり、その近くのなんの変哲もない場所に、白い花束が供えられていた。

すると、あそこが彼女が倒れていた場所なのだろう。

手すりに触れたまま横に移動しようとして、手のひらに小さな痛みを感じた。ふと見ると、アルミ合金の手すりを太い支柱に固定しているボルトの成形が粗雑で、かどが尖っているのだ。スカートの裾が引っかかって綻びたという話を思い出した。それにしても、特に大柄でもないわたしなのに、手すりの高さが胸のあたりまでしかない。鉄棒の要領でひよいと乗り越えてしまいたくなるような、奇妙な衝動に身体がすくんだ。

抵抗する相手を手すり越しに突き落とすことも、不可能ではなさそうだった。とっぷりと日が暮れた十二月の夜。周囲は低い建物ばかり。下からはなにも見えなかっただろうし、風が運ぶかすかな叫びを気にとめる者もなかっただろう。

さらに十分ほどかけて屋上をひとまわりしたあと、こんどは階段で四階までおりてB校舎に移動し、B校舎の中央階段を二階おりてA校舎に向かった。

高校生だったときに、事務室というところに用事があった記憶がない。

いろいろな申請や書類の受けとりは、すべて担任の先生を通していたように思う。先生でない事務職員がいることは知っていたが、申しわけないが、自分にとっては幽霊みたいな存在で、誰がなにをしていたのか、とうとう最後まで分からずじまいだった。だから、卒業当時の職員名簿で榎村文江という名前を見つけても、どんな顔だか思い出せなかったし、五十年配の女性から「十年前の卒業生の方だそうで、学校の様子もずいぶん変わっておどろかれましたようが、どうぞ宜しくお願いたします」などと、よそよそしい挨拶をされたことから、きつと、わたしの記憶のとおり接点がなかったのだ。

「このあいだの事件には本当にびっくりしてしまって、なにかお役に立てないかと思って参りました。まだ未熟なので、こちらこそいろいろと助けてください」

「ああ、来週にはね、相談室にあなた用のパソコンを入れて、メールも使えるようにしますから。生徒からのメールも受けられるようになりますよ」

「それはすごい」わたしは大げさに感激してみせて、すぐに自分の迎合的な態度に嫌気がさした。「とても助かります。初対面のカウンセラーに相談なんて、なかなかできませんからね、わたしから生徒さんたちに、いろいろなメッセージを発信していけたらと考えていました。——でも、生徒さんはもちろんですが、先生方にとっても今回のことはショックだったでしょうね——もちろん、榎村さまも？」

「そりゃあねえ、あなた、勤めて二十年以上になるけど、交通事故とか家で自殺とかはあったけど、校内で生徒が死んだなんてのは初めてだったし、なんたって自分が最初に見つけたんだからね、ぶったまげたわよ」

「榎村さんが見つつけちゃったんだ」

「そう、もうびっくりだよ。だいたい生徒が残ってるはずなかったし」

「残ってるはずがなかった？」

「だって、ほら、下校時刻が三時だったでしょ？ そのあと先生たちは少し残っていたけど、五時にはあたしが校内を見まわって、職員室と事務室のまわり以外は、全部消灯したんだもの」

「職員室のまわりっていうと？」

「この校舎の一階と二階。そのほかの教室は真っ暗だったの。生徒が誰も残っていないことを確かめて消したんだから。そりゃあ、どこかに誰かが隠れていなかったとは言いきれないけど、五時すぎだからね、暗闇でじっとしている以外にができるさね。消灯したあとで明かりをつければ事務室の表示で分かるし、そんなことは起きませんでしたからね」

「死んだ生徒は美術室にいなかったんですか？」

「昼間に絵を描いていたってね。でも、五時すぎに行つたときには明かりが消えていて、もう誰もいなかったよ」

「五時すぎの時点で誰もいなかったら、七時の見まわりのときに生徒が残っているはずないですよ」

「そうさ。校舎の出入口と裏門を施錠するための最後の見まわりだからね、普通に六限まである日だって、そのときには教室には誰もいないよ」

「でも、どうして樹林なんかを通つたんですか？」

「あそこは木が茂っていて見通しがきかないでしょ？ 近所の子供が遊んでいたりと、ホームレスが入り込んでいたりすると困るから」

「そんなことがあると心配ですね」

「だから、いつも見にくんだよ。そうしたら、ほら、あずまやのところまで来たらねえ、なにか大きな黒いものが横たわっていて。月のない夜だったし、校舎内の明かりも消えていたから本当に真っ暗で、はじめは様子が分からなくて、地面に大きな穴があいているのかと思つたくらい。まさかと思つて近づいていくと、のっぺりとした平面に見えていたものがだんだんと立体的になってきて……あと十歩くらいのところで人間だと分かつて、その瞬間にギャツと叫んで足が止まっちゃつた。おかしい？」

「いいえ、わたしでもそうだったと思います」

「頭のまわりが水溜りみたいに濡れてるし、手足も変な向きにねじれているし、ひとめで、ただ寝ている姿でないことは分かつたわけ。だとしたら、あとは先生の仕事だと思つてね、職員室に呼びにいかうとしたら、そこに細倉先生が来たの。どうしたんですかって言うから指さしたら——だめだね、若い女の先生なんて！——いきなり悲鳴をあげて、反対に思いつきりしがみつかれちゃいましたよ。生徒の安否を確かめるのは先生の役目ですよ？ 先生、ほら、ほら」つてしきりに背中を押したんだけど、先生つたら、駄々をこねるみたいに首をふって一歩も動こうとしやしない。それどころか地べたに座り込んだり走って、岩沼先生に生徒が死んでいるようだとお伝えしたんです。さすがに岩沼先生はしつかりしていて、うつ伏せに倒れていた生徒の身体を起こそうとされたけど、手を触れないほうがいいと考えたのでしよう、途中でやめて、死んでます、とにかくほかの先生方や警察に知らせないと」と言われました。そうして、あたしにその場に残っているように指図して、細倉先生を抱えるようにして行つてしまつたんですよ……いやでしたよ、残

つてろだなんて気持ちが悪くて！ そっちを見ないようにしていました。しばらくして岩沼先生が警察の人たちを連れて来たところで、あたしは事務室に引きあげたの」

「警察が来たあともいろいろと大変だったそうですね」

「ええ、大変な騒ぎでねえ……夜なのに次々と先生たちが出勤してきて、みなさん、深夜まで興奮状態でね、廊下を走る足音や怒鳴り声が途切れなくて」

檜山さんの口から「羽鳥雅子」という固有名詞は出なかった。彼女が心を揺さぶられたのは、暗闇のなかで気持ちの悪いものと出会ったという自身の体験についてであり、死んでいた生徒が誰だったのか、どんな生徒だったのかは関心もなかったのだろう。

わたしは、当たり障りのない言葉で別れを告げたあと、彼女が羽鳥雅子の死体を見つけた校舎裏の樹林に足を運んだ。

カエデやセンダン、イヌツゲなどが鬱蒼と茂った樹林は、昔から、おしゃべりの話題に事欠かない普通の生徒には縁がなくて、読書や物思いに耽りたい者がこっそりと訪れる場所だった。遊歩道の途中にはベンチも設置されていたが、いちばん落ちつけるのは、やはり、三本の道が合流する地点にあるあずまやだった。

ちようど、森の奥ふかくに分け入ったら、ぱっと視界がひらけて魔法の家が姿をあらわしたような感じ——。そこに腰を落ちつけて周囲を見まわすと、自分が大自然を支配しているような気分になって、もはやなにも怖れる必要はないという安堵を得ることができるとも、四、五人も腰かければいっぱいという小さな建物だから、地味ながらに場所とりは熾烈だ。そこでの出会いが新しい友情を育むこともあれば、苦手な相手が先に神聖な場所を占めていて口惜しさに震えることもある。高校時代のわたしにとっては、そんなふうにして、毎日のように足を運んだ大切な隠れ家だった。

しかし、新築されたC校舎のせいで様子はずいぶんと変わっていた。西側の樹木をかなり取り払ったのだろう。かつては樹林の中央にあったあずまやが、ほとんど外縁にさらけ出されて、校舎に隣接しようになっていく。都の二百周年記念植樹で苗木をわけてもらったと聞かされた梅の木も、校舎のはずれに二本のみを残してなくなっていた。これだから大切な思い出の場所を訪れるのは嫌いだ。

あずまやに男子生徒の姿があった。わたしは、それが例の写真に羽鳥雅子と一緒に写っていた少年であることに気づいたが、そのまま足を止めることなく通りすぎた。

四

月曜日に相談室にいくとノートパソコンが入っていて、檜村さんから、ログイン方法や情報管理について書かれたマニュアルを渡された。

とりあえず、カウンセラーとしての最初の挨拶を配信しようと考えて、思い浮かぶままにキーボードを叩いた。

「こんにちは、江良里子えらさとこです」改行——それから、「卒業以来十年ぶりに瑞鳳に帰ってきました。なにかもが懐かしいです。昔のわたしは、いつも自分を立派に見せようと背のびして、好きでもないゲーテの詩集をこれみよがしに持ち歩くような、いやみで人づきあいの下手な少女でした。他人から愛されたいと願いながら、無意識のうちに心に壁をつくって相手を傷つけました。当時の先生や友だちに聞いたら散々な評判のはずです。わたし

自身もそんな自分が嫌い、なんとか自分を変えたいともがき続けた高校時代でした。でも、今のわたしは、みえっばりで不器用だった自分を嫌いだと感じていた昔のわたしが愛しくて、彼女にオーケーだったよと言ってあげることができません。カウンセラーとして勤務することになりましたが、「悩みごと相談」などとむずかしく考えず、ひろく学校や家庭のできごとについて、みなさんが感じていることを聞かせていただけの事を楽しみにしています。いつでも遊びにきてください」

そのあとに、わたしが相談室にいる時間やメール相談のしくみなどを書きくわえて、あらかじめ用意してきた顔写真をつけて送信した。

ふと窓のそとに目をやると、先日の少年が木立のなかを歩いていくのが見えた。

話をしてみたい——そう思って外に出ると、はたして彼は、先週と同じようにあずまやでぼっねんとしていた。

「そこ、坐ってもいいかな？」ひと呼吸おいて、返事は待たずにそっと腰をおろした。

気むずかしそうに眉根を寄せてこちらを見ようとしめない。堅くむすんだ口もどがかすかに震えて、傍目にも神経がぴりぴりとしているのが分かった。身なりにも、神経質なまでにくずれたところがない。しかし、他人を容易に近づけようとしないうその雰囲気にもかかわらず、彼はまだ童顔で、全身からあふれている寂しさは見紛いようがなかった。

「落ち着くよね、この場所。わたしは——」

「知ってる。カウンセラーの先生」。「機嫌とりはやめろ」という響きを感じた。それならば、わたしもが素直にあなたの心に訴えよう。

「羽鳥雅子さんは、たいせつな人だったんだよね」

彼は弾かれたようにわたしの顔を見て、「そんなんじゃない」と強く言った。「そんな特別な関係なんかじゃなかったんです」

「クラスメートでしょう？ 特別な関係だなんて言わないわ」そう返すと、彼は恥じ入るように顔を赤らめた。

「ただのクラスメートではないけど、好きとか嫌いとか、そういう低次元な話ではなくて、おたがいに理解し、尊敬しあえる友だちだったんです」

「尊敬できる友だちだったのね」

「くだらない芸能人とかファクションには関心がなくて、もっと真面目な、ものごとの真理とか、人間の本质とかについて話ができる人でした。ほかのやつらだと笑って誤魔化してしまうような重いテーマを、しっかりと受けとめてくれる人だったんです。僕と彼女のあいだでしか共有できない価値観があったんです。男と女なんて関係ないですよ」

「真面目な問題について、いっぱい議論ができたんだ」

「僕たちはね、いつも学校に来るのがすごく早いですよ」少年は初めて微かな笑みを浮かべた。「七時半すぎには教室に来ていました。運動部の早朝練習も早いけど連中は教室にはいないから、毎朝、三十分くらいは、僕たちだけの大切な時間がもてたんです」

「毎朝、二人だけで話せる時間があつたんだ」

「最初はね、どっちが教室に一番乗りするかみたいなの、なんでもないことだったんです。もちろん羽鳥さんは、そんな馬鹿げたことでムキになったりはしません。僕が先に来ているのを見たって、ただ、「おはよう」としか言いません。でも、次の日は、きつと僕よりも早いです。机の上に本をひろげていて、僕が近くまで来た気配を確かめてから、おも

むろに顔をあげて、さあ、どうだっという表情をします。そうすると、もう、おかしくなっちゃって。自分の行動が相手から意識されていると思うと嬉しくて、理論的に行動してお互いを高めあおう——みたいな同盟意識で結ばれてたんです」

「お互いに人柄やものの考え方が理解できて、どんなことでも安心して打ちあけられる相手だった——？」

「そう、僕にとっては。それなのに羽鳥さんは、なにも話してくれずに逝ってしまった。それが悔しくて——」

「なにも話してもらえなかったことが悔しいんだね」

少年は、ちよつと間をおいてから呟いた。「殺されてたら、まだよかったのに」

「ええっ、どういうこと？」

「だって、そうじゃないですか。殺されたのだったら、精神的には苦しまずに死ねたということでしょう？ 事前に誰かに相談なんてしようがないもの」

「そうかしら……。他人に傷つけられるのは、とても怖いと思うけどな」

「その瞬間はね。でも、自殺するような場合って、きつと、何日も、何週間も、ずっと苦しみ続けるんですよ。そんなの可哀想すぎる——僕ってへんですか？」

わたしは強くかぶりを振った。少し不自然だったかもしれない。

「僕ね、知ってるんですよ。なぜ彼女が死んだか。僕だけが知ってるんです。成瀬という男のせいです」

思いがけない名前が出てきて息を呑んだ。それは話が違うのではないか——自分で死なせておいて、あんな手紙を寄こすはずがない。だが、わたしは、そんな思考の乱れをこの少年には悟られたくなくて、精一杯に平静を装った。

「成瀬さん？ 瑞鳳の人の？」

「ちがいます。どこかのカメラマンなんです」

「よかったら聞かせてくれない、そのこと？」

「何日か前の朝でした。突然、羽鳥さんから、ラブレターを出したことがあるかって訊かれました。おかしな質問です。だって、羽鳥さんは、誰よりもその答をよく知っていたはずなんです。おかしな質問です。きつと僕の反応がおかしかったんでしよう、羽鳥さんはすぐに吹き出して、そうじゃない、もつと熱烈な、好きです、抱きしめたい、この思いが届かなかったら死んでしまいたい」といった調子のやつだと言いました。僕は、疑われているみたいで面白くなって、そんな意味あいのことを答えました。羽鳥さんは笑って、こともなげに、そんなことは全然心配していない、自分がもらったんだ、なんて言うんです。ええっ、誰からさ？——って訊いたけど教えてくれなくて。その代わりに、自分が誰かにいやらしい手紙を書いて無視されたと想像してみる、そんなときにどうするかと訊かれたんです」

「女の子に手紙を書いて無視されたら、あなたならどうするか」

「僕はぜったいに、そんな恥ずかしい手紙は書きませんよ」少年はきつぱりと言った。「でも、それじゃあ話が続かないから、面白半分で、何回でも繰り返して出すって答えたら、その瞬間に羽鳥さんの顔からすうつと笑顔が消えて、真顔になってしまいました。とてもへんでした。普段だったなら、真面目に答えていないって簡単に見抜いて笑ってすむのに、ますます真剣な様子で、じゃあ、迷惑だから二度と手紙を寄こさないでと、はっきりと返事が来たら？——って。こうなると、僕も意地みたいになって、手紙でだめならば相手を

つかまえて直接に気持ちをぶつけるって答えたんです。そうしたら彼女は、たったひとと「そうなんだ」って、大きなため息をついて黙り込んでしまったんです」

「その、羽鳥さんが手紙をもらった相手が成瀬さんだったの？」

「そのとき羽鳥さんは手紙を持っていて、ちらっとだけ見せてくれたんです。中身は見せてくれなかったけど、封筒の裏に『成瀬俊吾』という名前が書いてありました。羽鳥さんの話では、十一月の文化祭で声をかけられて、あとで写真を送るからと言われて住所を教えたら、そんな手紙が来るようになったんだそうです」

「それがさっきの、『思いが届かなかつたら死んでしまいたい』っていう手紙なんだ。そんな手紙をもらったら気持ちが悪いよね。でも、それが自殺の原因になるかな？」

「羽鳥さんは自分のことを責めていました。軽率で救いようのない馬鹿だって。でも、もうおしまいにするから——とも言ってた」

「もう、おしまいにする？」それが自らの死を意味するとは思えなかった。

そのあと少年は、先週の初めにあった告別式の様子を、とつとつと語ってくれた。

豪徳寺の近くの自宅で、羽鳥家の親族や、父親の仕事関係者が多数出入りするなかで、瑞鳳高校からは教師とクラス委員だけが代表でなかに入り、彼を含めて他の生徒は屋外の焼香台で手を合わせた。特別に親しいつもりでいたのに、その他おおぜいの一人として扱われたことが悲しかった。挨拶に立った父親が、「やすらかに眠る」と言えずに、何度も「すこやかに」と間違えて言葉を詰まらせたこと。整列した生徒たちが校歌を斉唱するか、白い棺がひっそりと運ばれ、彼は人目をはばからず泣いたこと。——わたしは、そういう物語に共感し、大切なものをなくした少年の気持ちを受けとめた。

一段落ついたところで、わたしは、思いきって例の写真を彼に見せてやった。

「この写真について、なにか心当たりはないかな？」

その瞬間に少年の顔が凍りついた。わたしは、少年とのあいだに構築できかけていたラポールが崩れて、相手が心を閉ざしたことを悟った。

「卑怯です。こんな写真で、僕たちの関係が不潔なものだったと想像するなんて。そもそも、どうして先生がそんな写真を持っているんですか」

「ちよっとね」愚かにもわたしは、その質問への答を用意していなかった。「羽鳥さんが亡くなった日の写真じゃない？」

「いつ撮られたかなんて知りません。盗み撮りしたやつに訊いてください」

そして彼は、羞恥と憎悪の入り交じった一瞥を残して立ち去った。

五

相談室に戻ると、岩沼先生から、細倉先生の話聞いてやってほしいというメールが届いていた。二年前に来たばかりの細倉先生は、ただでさえ周囲の先生から孤立していたところに、自分が顧問をつとめる美術部の生徒が死んだことで、だいぶ参っているらしい。

「でも先生、まるで細倉先生の保護者みたい。ひよっとして——？」職員室の岩沼先生に確認の電話をかけたら、「ばかいえ、私は妻子持ちだぞ」と叱られた。

「彼女はこっちにも机があるけど、いまは美術の準備室にいると思う」

終礼時刻まで待っていたが訪ねてくる様子もないので、こちらからぶらりと美術室に出

向いてみることにした。いなければそれまでのこと。いずれにせよ、羽鳥雅子が最後に目撃された場所は見えておきたい。途中、いくつかの教室の様子をそれとなく伺ってみたが、クラブ活動で使われている部屋を別にすれば、すでに、どこも人影はまばらだった。

美術室はB校舎四階の突きあたり。つながっている準備室の入口はひとつ手前だった。

「あら、いらっしやい。よくここが分かったわね」

所狭しとキャンバスや石膏オブジェを並べた小部屋の片隅で、作業机に向かっていた女性が立ちあがった。自分よりも四、五歳年上かなと踏んだ。服を汚さないように制服代わりに白衣をまとった姿は、昔の美術の先生と一緒だった。

「どう？ すこしは慣れました？ まあ、そこにすわってよ」

彼女から反対に気づかわれて、わたしは、勝手のちがいに戸惑いながら腰をおろした。

二年前に来た先生だと聞いて、なんとなく自分のほうが先輩で、彼女は年上であっても新参者という気持ちになっていたのだ。

「先生こそ、この前の事件で気を落とされたのではないかと心配で」

「分かっている。岩沼さんから、なにか言われたんでしょう？ あの人は、いろいろと心配してくださって、あたしにとって、この学校でただ一人の味方みたいなもの」

「ほかの先生は味方じゃないんですか」

「そういうわけじゃないけど」細倉先生は顔を曇らせた。「やっぱり、今度のことが堪えているんでしょうね」

「うん」——深い意味はない。

「つくづく自分は教師失格だって思ったもの。生徒が血を流して倒れているというのは、心配よりも恐怖が先にたつて、なんにもできなかった………弁解のしようがないわ」

「倒れているのを見て、まず、怖いって感じたんですね」

「怖かったよ。でも、それだけならよかった。生理的に近づきたくない、気持ち悪いっていう感情——それは人間として許されないよね」

「樫村さんが先に見つけていて、そこに通りかかったんですね」

「叫び声をして、行ってみたら彼女がなにかを指さしていたの。すぐに事情は分かっけど、そのとたんに身体がすくんで、膝ががくがくして動けなくなりましたわ。そのうちに樫村さんは、岩沼先生を呼んで来るからといって、行ってしまった。一刻も早く逃げ出したいといった感じで、やられた——って思ったわ。あたしときたら、そのまま、なにもできずにしゃがみ込んで、ぶるぶる震えてた。だらしないでしょ？」

「いいえ——さぞかし心細かったですよ」

「しばらくして岩沼さんが来たけど、羽鳥さんの身体にちよつと触れただけで、もう手のほどこしようながないから、とにかく手分けして警察やほかの先生に連絡しようと思っただけ、あたしは岩沼さんと一緒に職員室にもどったわ。岩沼さんが警察と救急車、あたしが校長先生や学年主任の先生に電話することにしたんだけど——最初に校長先生にかけようと思っただけ、受話器に手をのばしたら、それが鳴ってね、出てみたら羽鳥さんのお母さまからだったの。娘が帰らないけど何時ごろ学校を出ましたかって。それはもう、びっくりして」

細倉先生はちいさく肩を震わせて沈黙してしまった。いまでも、その夜の情景が生々しくよみがえり感情が波立つのだろう。

「羽鳥さんは授業が終わったあと、夕方までここで絵を描いていたんですね。ほかの

生徒が一緒だったそうですけど、どんな様子でした？」

「二時半ごろだったかしら。あたしも自分のクラスの終礼があつて、いったん職員室に寄つてから来たのだけど、そのときにはもう二人がいたの。ここじゃなくて、となりの美術室によ。迫さんはさまのことは聞いていなかったの、あれつと感じたけど、まあ、おなじ美術部の仲間だし、無理に帰らせることもないと思つて、いいよつて言ったの」

「絵を描いていて、口論になつたんですつて？」

「ええ。でも、あたしは、べつに付き添つていたわけではなくて、美術室とのあいだの戸を閉めてこちらで仕事をしていたので、くわしくは見ていなかったのよ。三時ちよつと前だったかな、大きな声が聞こえてきたので、びっくりして見にいったら、二人が言い争つていたの。羽鳥さんは滅多なことでは怒つたりしない子なんだけど、そのときは彼女のほうに切れていて、迫さんは、そんな彼女の様子に戸惑つている感じだった」

「原因はなんだったんですか？」

「分からない。あたしが見たときには、ちようど羽鳥さんが、〃いい加減にしてよ！ だいたい、どうしてここにいるのよ。〃と叫んだところだった。事情を訊いてみたけど、両手を腰に当てて仁王立ちになつていた羽鳥さんは、ぐつと声を呑みこんで、ふり向きもせず〃なんでもありません〃つて答えて、ひきつた笑顔で迫さんに謝つたわ。あたしが知つているのはそこまで。三時から打ち合わせがあつたので、二人に、帰るときは明かりを消すようにと言いおいて、あたしは職員室に戻つたの。そのあと二人がどうしたのかは分からない。櫻村さんが五時に見まわつたときには、もう、美術室の明かりは消えていて、誰もいなかったの」

「いちど家に帰つたらいいですね」

「そう言われているみたいだけど、どうかしらね」

「なにか、気になることがあります？」

「羽鳥さんの描きかけの絵が、イーゼルに架かつて出たままになつていたの。普通は、制作中の作品は準備室の棚に片づけるのに。まあ、授業で教室を使う予定がなければ邪魔にはならないから、土日の休みに来てやるつもりだったとしたら、出しっぱなしでもおかしくはないんだけど……それつて、自殺しようとする人の行動じゃなくない？」

「つまり美術室を出たときには、羽鳥さんは、自殺なんか考えていなかった——と？」

「そこまでは言わない」細倉先生は神経質そうに笑つた。

「岩沼先生に聞きましたよ。先生が、羽鳥さんが自殺したはずがないと言つたつて」

「そんなこと言つた？ そう——そのときのあたしは、腹を立てていたんだと思う。ほかの先生たちが、自殺という結論に飛びつきたがつていたことにね」

「自殺という結論に飛びつきたがつていた？」

「そう！ ひどいものよ。模範的な生徒だなんて褒めそやしていたのに、その羽鳥さんが死んだのに、誰も、真剣にその理由を考えようとしていなかった。自殺者の心理なんてどうせ誰にも分からないさ——つて感じで、自殺という結論でさつさと幕を引きたがつていた。それつて羽鳥さんに対する冒瀆じゃない？ でも結局、それが学校にとって一番都合のいい結論なのよ。なんて下品な連中だらうつて思つた」

「自殺は、都合のいい結論？」

「そうですね。校内に人殺しがいたとか、安全管理にミスがあつて事故が起きたとかい

うのと違って、自殺したのは本人の問題で、学校の信用には疵がつかないもの」

「先生は、羽鳥さんが一年生のときの担任でもあったから、なおのことお辛かったですよね——。自殺の理由について心当たりはありませんでしたか？」

「分からない。そういう意味ではむしろ可愛い子だった。見ていてね、あ、今日は元気がないな、何だかうわの空だな」と気がつくでしょ——でもね、そんなときに、どうしたの」と訊ねてもだめだった。どんなに辛そうなときでも、話しかけると一瞬のうちに仮面をつけて、「ええっ、どうしてですか？」ってはぐらかしてしまうの。でもね、彼女に限らず思春期の子供の自殺って、ほとんどの場合は原因が分からないのよ。はっきりと家庭の事情とか学校の問題とかに原因を特定できるのは四割くらい。残りは誰にも心当たりがなくて分からずじまいになるの——ごめんなさいね、あなたのほうが専門よね」

「いいえ、現場のことはなにも分かりませんから」

「今となつては——あの子のほうが心配」

「はさましずか迫静香さん？」当てずっぽうで言ってみた。

「ええ。今もとなりの美術室にいるけど……。羽鳥さんの思い出はしまっておいて、自分の絵を仕上げてみたらと言ってるんだけど——いえ、ほんとは絵の続きなんてどうでもいいの——あれ以来ずっと、毎日のように来て、続きを描こうとしては、そのたびに途方もなく高い壁の前で打ちひしがれているみたいに、固まっちゃってるの」

「ちよつと話してみましよう」

美術室に通じるドアの小さなガラス窓から、そつと様子をうかがうと、それらしい少女が、横幅五十センチくらいのキャンバスを架けたイーゼルの前に腰かけている姿が見えた。わたしは、そのドアを開けることはせずに、いったん廊下に出てから、あらためて廊下側の出入口から美術室に入ることにした。

六

美術室にいたのは迫静香だけだった。キャンバスを見つめたまま、右手の絵筆を所在なげにぶらぶらさせているだけで、その心は、どこか遠い世界をさまよっているかのようだ。パレットは脇のテーブルに置きっぱなし。そこには、混ぜ合わせようがなさそうな三色の油彩絵具が、歯ブラシにつけるくらいに申しわけ程度に練り出してあった。

「心配なんてしてくれなくて大丈夫です」近づくと、彼女は面倒くさそうに言った。

「でも、絵が描けないほどつらいんでしょう？」

「こんなもの」彼女は筆の軸の先でキャンバスをつついた。「続けることなんてできっこないのに、先生にはそれが分からないの」

「あなたが最後に羽鳥さんと残って描いていた絵ね」

「そういうことになってるわね」すねたような返事だった。

どこかの沼地の夕景色を描いた絵だった。左手にはくすんだ色合いの葦原が広がっていて、地平線のかなたに太陽が沈もうとしている。もうほとんど光が届いていない水面は暗く、鏡のように静かだ。空は、夕陽のオレンジ色から茜色に、そして、すっかりと夜の帷に包まれた董色へとみごとにグラデーションを見せており、右手の暗い空から反対の方向に向かって、数えきれないほどの野鳥の群れが舞っていた。

「雅子とは中学時代からずっと一緒に、彼女と過ごした時間がここで止まったの。彼女を置き去りにして、その時間を先に進めるわけにはいかないでしょ？ 筆を近づけると、えっ、どうするつもり？——って雅子の声が聞こえて、手が止まる感じ。分かります？」

わたしはうなずいた。理屈が分からなくても、彼女の悲しみを感じることはできた。

「土曜のお昼すぎに、岩沼先生と細倉先生がうちに来たの。そのときに雅子が死んだことを知らされました。それから、雅子と言い争ったのはなんだったの？ どうして一緒に帰らなかったの？ 別れぎわに彼女はどんな様子だったの？——そんなこと、わたしのせいじゃないのに、いちいち説明なんてできない！」

「まだ親友の死を受け入れられないうちに、質問攻めにされちゃったんだね」

「一緒に帰らないことだってあるし、だからといって、わざわざ相手の顔色なんて確かめていないし。そりゃあ、たしかに口げんかもしたけど、それが原因で自殺したんじゃないかなんて、言いがかりみたいで、すぐくむかついた」

「そんなことを言われたの？ 羽鳥さんが亡くなったのは、あなたたちが言い争ってから何時間もたってからだったのに」

「わたしには、そういうふうには聞こえたんです。だって、そのときは、家に一度帰ってから学校に戻ったなんて教えてくれなくて、口げんかのすぐあとで死んだみたいな話し方だったんだもの。だからカッとなって、ちゃんと仲直りしました！ 雅子はまだ絵を描いていて、わたしも普通にさよならを言って先に帰ったんだから、そのあとのことはなんにも知らない！」って叫んじゃって。母がすごい剣幕で先生たちに文句を言って、追いつちやいました——。月曜日の朝、岩沼先生からみんなに説明がありました。雅子が死んだ時間とか、バッグが家にあつたとか、描きかけの絵が残っていたとか……。放課後に美術室に来てみたら、その絵は、挨拶に来た家の人が持って帰ったあとでしたけど」

「羽鳥さんはどんな絵を描いていたの？——細倉先生に訊いたほうがいいかな」

「ほかの人に訊いたってだめです」彼女は、死んだ少女との関係を誇示するように断言した。「雅子とわたしで決めたんですから。十一月の自然教室で行った伊豆沼と一緒に描こう。でも、完成するまでは誰にも見せないで、いっせいのせで、みんなをアッと驚かせてやろうって。この絵は、日が暮れてガンの群れが寝ぐらに戻ってくるってところ。もうひとつは——」対になる情景を思い浮かべて彼女は目を閉じた。「カモやハクチョウが一杯いてね、子供たちがエサをやっている——水面が見えないくらいにひしめき合ったカモたちが、岸にもあがって足もとまで来ているの。男の子がパンのかけらをやるうとしているんだけど、勇敢にもその手に飛び乗ろうとして羽ばたいているカモがいてね、びっくりした男の子が、ぼかんと口を開けて目を丸くしている……とっってもかわいいの」

「絵が完成しなくて残念だったね」

「ひどすぎる。あんな殺伐とした怒鳴りあいがある、雅子との最後だったなんて、悔やんでも悔やみきれなくて——」

「羽鳥さんが苦しんでいたことについて、心当たりはない？ 口げんかのときも、もとははといえば、羽鳥さんが先に怒ったんでしょう？」

「あの日の雅子は変でした。いつもだったら、授業が終わって、クラブがあれば声をかけあって一緒に行くし、そうでなくても、どこそこに寄ってこうよとか、ゴメン、今日は急ぐからお先にとか——そういう言葉のキャッチボールがあるでしょ？ だけど、あの日は、

それが煩わしくて一人になりたがっているみたいでした。だから、すぐには分からなかったんですけど、わたしが、つきあうよって——べつに深い意味はなかったんですけど——そういつと一緒に美術室に来たこと自体が気に入らなかつたんだと思います。あとから来た細倉先生にも、〃わたしは岩沼先生から許可をいただいたんですけど〃みたいに強調して、暗にわたしは無許可だと言いたげでしたけど、先生が気にしない様子だったので、がっかりしたみたいでした。それから絵の続きを始めて、いろいろと話しかけても黙りこくったままで、ようやく、わたしも、なんだかへんだぞって気がついたんです。そもそも彼女は、自分でここに来て道具をひろげたくせに、絵にはぜんぜん注意が向いていませんでした。そのうちに、わたしが〃街角で見かけた彼女、みたいな感じですまし顔でグラビアに登場する子って馬鹿だよ。〃と言ったら、途端に雅子が怒りだして——」

「べつに理由なんて——。わたしたち、そういう、同世代の批判みたいな話題で盛りあがるのが多かつたんです。どんなに優等生っぽくても、おだてられて平然とメディアに登場できる時点で、大切な自分を切り売りして墮落だ——そんな内容でした」

「羽鳥さんは、雑誌やテレビに出たがるような人？」

「まさか。うちの学校にそんな人はいません」

迫静香がきつぱりと答えたのを聞いて、ああ、彼女は文化祭のときのことを知らないのだと思った。瑞鳳高校の文化祭が雑誌で紹介されたことも、自分の発言がどれだけ相手に堪えるものだったかも。いずれは分かつてしまうかもしれないが、わたしとしては、この問題には深入りせずに、そっとしておいてやることにした。

「ところで、羽鳥さんと仲のよかった男の子がいるでしょう？ どんな子かな？」

「仙田？」口にするのも汚らわしい、といったふうには彼女は顔をゆがめた。

「仙田くんていうんだ」

「仙田隆一、あれは馬鹿です」にべもない。「勉強はできないし運動もだめ。それなのにしかっただけ雅子を真似して、誰とも打ち解けずに超然としたふうを装って、自分と雅子に話を話しているかといえ、普通は右手でナイフを持つけどフォークのほうが動きが複雑だから逆が合理的じゃないかなって、くだらないことばかり。雅子は相手にしていませんでした。やさしい子だから、調子を合わせて面白がってみせてあげていただけです」

「雅子さんにも、ちよつと超然としたところがあつたんだ」

「ある種類の人たちにとつては、近づきにくかつたかもしれせん。でも、こちらが真面目に接すれば、素顔はとても人なつこいんです。真面目さを鼻にかけたところがなくて、そこが仙田とは大違い。彼女は、自分から馬鹿騒ぎに加わることほしくないけど、周囲が盛り上がり上がっていればちゃんと一緒に笑うし、下品な展開になつても、あからさまに不愉快な顔は見せずに、それはそれで認めてあげる——ふところの深さがありました」

「仙田くんは、雅子さんがなにか悩みごとがあつたら、打ち明けるような相手かな」

「ありえませんが冷たい返事は、口に出すまでに時間がかかつて辛そうだった。「仙田なんかには雅子のが分かつたはずがありません。わたしには、中学で瑞鳳に入った最初から、ずっと雅子の一番の親友だつたという自負があります。高校でひよつこりと割り込んできた外部生のあるやつ——わたしは、認めない」

あなたは、自分では認めないだろうけど、仙田くと似ているのかもしれないね。無条件の絶対的な信頼。そんなものはあるはずなのに、自分の値打ちを確かめるためにはその存在を信じる必要があるで、今、その信念がもろくも崩れ去って、索漠とした思いで立ちずくんている。でも、それだけではない。なにか、もっと重大なことが胸につかえている。焦り、それとも恐怖？——わたしは、なんとなくそう感じた。

七

それから何日かのあいだ、カウンセラーという立場をあまり意識せずに、瑞鳳の生徒たちと楽しいときを過ごした。図書館や食堂に行つて手頃なグループを見つけて話しかけてみたり、テニス部やコーラス部の練習に飛び入り参加させてもらったり、そんなことをしているうちに、徐々に、冷やかし半分で相談室に訪ねて来てくれたり、ギョツとさせられるようなため口のメールをくれる生徒があつて、わたしは、自分が生徒たちに受け入れられつつある過程を素直に楽しんだ。どれくらい受け入れられたかといえば、たとえば、岩沼先生と細倉先生がいい関係みたいだ、などという冗談とも本気ともつかないどぎつい噂話を教えてもらえるくらいになつたということだ。

もうすぐ終業式だというある日、岩沼先生と一緒に、豪徳寺にある羽鳥雅子の家を訪問することになった。多少なりとも保護者の気持ちが悪く落ち着いた頃合いを見はからつて、あらためてお悔やみを述べるとともに、まだ学校に残っていた私物や書類を返却する事務的な理由もあつた。

羽鳥雅子の自宅は、駅南の商店街の突きあたりを左に曲がり、高い石塀で囲まれた豪徳寺の境内に接している住宅街の一角だった。幅が二間もある黒い鉄の門扉があり、車の出入りの際には全体がスライドして大きく間口があく仕組みになつている。門扉の右端に、昼間は施錠されておらず誰でも出入りできる小さな扉がついていて、そこから敷石づたいに数メートル入つたところが玄関だった。奥まつていて、玄関先に荷物を置いても盗難にあう心配は少なそうだった。

電機メーカーの取締役だという父親は、なにを話しかけても弱々しく微笑むばかりで、わたしたちが言葉を交わした相手は、もっぱら母親の希美子さんだった。

「五時半ごろに帰って来ましたら、玄関先に通学バッグありましてね。でも以前にも、買物を思いだして急いで商店街まで往復するとかで、そうすることがありましたので、さして気にもとめませんでした。ところが二時間ちかくたつても帰って来ませんでしたよ？ これはへんだ、もしかして学校まで戻つたのかしらと思つて、電話をかけたら女の先生が出て、ひとこと「死にました」つて。一瞬、なにを言われたのか分かりませんでしたわ。何時ごろ学校を出たかと訊いたのに、なんて見当はずれな答えだろうと思つて、しばらく要領を得ずに押し問答みたいになつてしまつて……」

「お伝えのしかたに配慮を欠いて申しわけありませんでした」岩沼先生がぼそぼそと釈明した。「いちからもうすつかり慌てていたのですから」

やがて話題は、雅子がなぜ死んだのかに移つていった。

「警察の方からは、玄関に鍵がかかつていたので、よそに遊びに行つて、なにか気持ちの乱れることがあつたのでしようと言われましたけど、納得できませんでしたわ。じきにわ

たくしが帰って来ると分かっているのに。そのときに家のなかに入れていたら、へんな気も起こさなかつただろう、みたいに言う人もいますけどね——」希美子さんが声をつまらせる、夫が困惑ぎみに「きみ、もうそのことは」と口ごもった。「——だけど、そうだったのかもしれない。まったく意外で、ええつ、どうしてっていう感じでしたもの。親として、あの子について分かっていたつもりですが、その瞬間に、全部ひっくり返って否定されてしまったのです。いくら、あの子はそんなことで遊びに行ったりしませんと叫んでも、それは、わたくしが知っている、自殺なんてしない雅子のことですもの。でも、今回のことであの子は、わたくしたちにとつて分からない存在になってしまいましたわ。しっかりと結ばれていた絆が、ふいにぶつりと切れて——死んだからという意味じゃなくて、手のとどかない彼方に行ってしまった感じ……」

「でも、お母さまが夕方までお留守なことは、雅子さんもご存じだったのだから」希美子さんの気持ち、少しでも軽くなればと思つて指摘してあげた。

「ええ、ええ。ですから、鍵を持って行くように言つたのに、クラブのことをやって適当な時間に帰って来るから必要ないと言いましてね」

わたしは思わず岩沼先生と顔を見合わせた。羽鳥雅子は、母親の留守を理由にあげて遅くまで残りたいと希望したのに、家には正反対の説明をしていたらしい。

「クラブのこと、というのは例の油絵ですよね？」

「ええ。十一月の東北旅行がたいそう素晴らしかつたそうで、帰つて来てからずっと、そのときの景色を描くのだからといって張り切っていました。小さいころ地方で育つたためか、あの子は自然や生き物が大好きで——それが半端じゃなくて、動物園で飼われたり公園で餌づけされている生き物は嫌いで、野生のままの姿でないと喜ばないんです。東北旅行では何千羽もの水鳥が、夜明けと同時にいっせいに飛び立ったり、夕暮れに真っ黒な雲のように戻つて戻つて来たりする光景が、それは素晴らしかつたと、熱に浮かされたように話してくれました」

「お友だちにとつても、最後に雅子さんと一緒にそういう体験ができたことは、一生の思い出として残るでしょうね」

羽鳥雅子の友人関係について話題を振つてみたところ、母親は、迫静香のことも仙田隆一のことでも知つており、それぞれ好ましい相手と考えていたことが分かつた。また、同級生以外の男性から交際を迫られて困つていなかったか、遠回しに訊ねてみたが心当たりがないようだった。

「手紙だつたら、うちでは、雅子が学校から帰つたときに郵便うけから取つて来るのが日課でしたから、自分あての郵便物はそのまま二階に持つてあがつて、わたくしたちは気がつかなくつたかもしれません。でも、こんなことがあつたので、なにか書き残したものでないかと子供部屋を探したのですけどね、変わった手紙なんてありませんでした。携帯電話も持たせてなかつたし、そんなことは、なかつたんじゃないかしら」母親がそう言う、ほとんど喋らない父親もこぞとばかりに同調した。

もちろん手紙は、死んだあとで見つからなかつたからといって、はじめから来ていなかったという保証はない。成瀬俊吾からの手紙は何通あつたのか知らないが、いずれも、雅子さんが、こつそりと両親に見られないように処分してしまつたのだろう。

「あの子は、目上から言われたことを、なんでも無批判に鵜呑みにしてしまうところがあ

りましてね、叱るときにずいぶんと気をつかいました」

母親が感慨ぶかげに話し始めたとき、わたしは、まったくべつのことを考えていて、とっさに話について行けなかった。それまでに聴いた話のどこかに、なにげないようで、とつともなくてならぬ、ひどくまちがったものがあるという違和感があったのだ。それがなにかは分からなかった。考えごとをして聴き漏らすなんてカウンセラー失格だが、幸いにも先生が適切に相づちを打っていて、彼女が気分を害したふうはなかった。

「下の娘は、強情に口ごたえするので、〃しまった、言いすぎたかな〃って感じても、言いあうなかで子供の主張を認めてやって回復できるのですけど、雅子の場合には、それができませんでした。それから、あの子は、実際の行動だけでなく、ものごとの感じかた、本能的な心の動きまでが正しくなければいけないと信じていました。我慢できればいいのではなく、初めから、正しくないものに心を動かされてはいけないのだと。なにかのときに、わたくしが厳しく話したことが、刷り込まれてしまったんでしょうねえ……」

しばらくして、侘びしげに寺の鐘が鳴り始めたのを機に、わたしたちは羽鳥家を辞することにした。その屋敷は高台にあって、門を出ると、カラスの群れが彼方の森を目指して飛ぶのがよく見えた。

思いのほか窮屈そうな生きかたを垣間見て、今さらのように羽鳥雅子のが哀れに思えた。先生にそのことを話したら、浮かない顔で「それは瑞鳳の校風だよ」と言われた。「お母さんは自分を責めていたけど、親たちが、そういう教育を望んで選ぶ学校が瑞鳳なんだ。きみたちだって、自分では気づかないうちに、そういう型にはめられて教育されたんだ。だから、羽鳥くんの考えかたを聞いても、共感こそすれ、へんだとは思わなかっただろ？　うちは、めちやくちやに堅いよ」わたしには返す言葉がなかった。

八

その日のうちに、わたしは、羽鳥家で自分の集中力を途切れさせた、奇妙な違和感の正体をつきとめた。ひとたび気がつけば、羽鳥雅子の死の真相は明らかで、だから翌日、迫静香が思いつめた様子で姿を見せたとき、彼女がなにを話しに来たのか、すぐに察しがついていた。

「ずっと言わなきゃと思ってた。でも——」それっきり何も言わない。

「紅茶でも入れようか」

備えつけの電気ケトルに湯が沸くまでのわずかな間、彼女は何度も口を開きかけてはやめた。わたしは、そんな彼女の逡巡をよそに肅々とティーカップを用意して、最後に、彼女に熱い紅茶をすすながら「分かっているよ」と伝えた。

「えっ……？」

「分かっている。土曜日に先生が来たとき、口げんかが自殺の原因だと言われたように感じただよね。そのときのあなたは、雅子さんが死んだのが夜遅くなってからだとか知らなかったから」彼女はうなずいた。「それで怖くなって、思わず、ちゃんと仲直りした、普通にさよならをして自分が先に帰った——そう叫んでしまったのでしょうか？」

彼女は驚いたように目を見はった。

「羽鳥さんは、ほんとに何時にいなくなったの？」

「四時でした——でも、おかしいんです。パレットの絵具を拭いて筆を洗いはじめたから、帰るのかと思ったら、そうじゃないと言って、キャンバスを準備室の棚に片づけて、通学バッグはそのまま残して身体ひとつで出てって——それっきり、帰って来なかった。四時半まで待ったけど、帰って来なくて」

「それで、あなたはどうしたの？」

「準備室やトイレを探してみたけど、どこにもいなくて、それでようやく気がつきました。雅子は、わたしが一緒に帰ると言いだすのを怖れて、わざと、また戻って来るようなふりをして帰ったんだと。とても悲しくて、でも納得できなくて、それで——」

「それで迫さんは、羽鳥さんの通学バッグを家に届けてあげようと考えたんだね。だけど、家には誰もいなかったから、しかたなく玄関先に置いてきたんでしょ」

「でも、どうして？ なぜ分かったんですか？」

「このあいだ美術室で、あなたが自分の描いていた絵だといって見せてくれたものが、実は羽鳥さんの絵なんだと気がついたから。きのう雅子さんのお母さまと話したの。公園で餌づけされている生き物なんか好きでなかったという雅子さんが、あなたが説明してくれたような場面を描くはずがない。雅子さんが感動したのは、野生の水鳥たちが朝立ちしたり寝ぐらに戻ってくる光景だった。絵が取り違えられているんだ——って。でも、なぜだろう？ 先生たちは、あなたたちがどんな絵を描いていたか知らなかったから、美術室に残された絵を見て、死んだ羽鳥さんと結びつけて考えてしまったとしても無理はない。だけど、なぜ当事者であるあなたが、間違いを指摘しなかったのかしら？」——迫静香は泣きそうな顔になっていた——。「それが不思議だった。あなたにとって、雅子さんが描いていた絵を押しつけられて、続きを描くように言われることは、とてもつらかったはずなのに。でも、あなたが、二人の絵が取り違えられていることに気がついたのは、月曜日に学校に来てからだだったんだよね」

「はい。土曜日の午後に残きをやるつもりだったんですけど、先生たちが来て雅子のことを聞かされたので、やめてしまいましたから」

「あなたは、月曜日に初めて、雅子さんが自宅まで往復して七時に自殺したというストーリーを聞かされて、さぞかしびつくりしたと思うわ。——でも、それは、あなたにとつて悪くない解釈だった。土曜日にあなたが思い浮かべたのは、あなたを残して出ていった彼女がそのまま発作的に死んだという最悪のストーリーだったから、そうではなかったと知って、救われた思いだったでしょう。でも、あなたの立場はデリケートだった。それは、とつさのこととはいえ、自分が先に帰ったのだと嘘をついてしまったこと。さらに、自分がやったこと——美術室に残されていた絵や、玄関先にあつた通学バッグのことまでが、学校の説明では、羽鳥さんの行動としてストーリーのなかに織り込まれてしまったこと。どこかひとつを訂正すれば、自分が守られているストーリーが崩れてしまうかもしれないし、嘘をついたこともばれてしまうかもしれない。そうになったら、痛くもない腹まで探られて、やっぱり迫静香が傷つけたんだと言われるかもしれない」彼女のむせび泣く声が聞こえた。「そんなことを考えて、あなたはなにも言えなくなってしまうたのね——」とても、とてもつらかったんだよね」

彼女はひとしきり泣いて、さっぱりとした顔つきになった。

わたしは、これ以上あなたが苦しむ必要はないのだ、あなたにとっては、もうぜんぶ終

わったことなのだと言い聞かせてやった。吐き気を催すような、その先のことを彼女に知らせるつもりはなかった。

九

年の瀬も押し寄せまってから、小父さまから経過報告においでと呼ばれた。警察としても、本格的に動くかの判断を年明けまで持ち越したくはないのだろうから、わたしとしても、ここらあたりが潮時だと感じていた。

「羽鳥雅子の午後七時までの居場所がすべてだったの。家に帰ったあとで学校に引き返したなんて、自殺する人の行動じゃないし、殺された場合でも、あり得ないと思ってた」

「どうして？ 時間を決めて待ちあわせたのかもしれないよ」

「簡単に言うけれど、犯人にとっては大変なことだよ。真っ暗で誰もいない学校で会おうなんて、それだけで何事かと思われてしまう。わたしが羽鳥さんだったら、相手が先生や同級生でも気味が悪くて、そんな誘いには乗れないわ。それに、犯人にとって、わざわざ彼女を学校に連れて来る意味ってなに？ それだけで犯人は学校の人だと疑われるよ」

「外部の者でも、学校には自由に出入りできるんだろう？」

「理屈の上ではね。でも、羽鳥雅子が屋上から落ちたということは、犯人も校舎のなかに入って、屋上まであがったんだよ。これは、外部の人間にとっては、すごく心理的なハードルが高いと思う。だから、いったん下校した羽鳥雅子が、犯人の意図によって学校に戻ったという可能性は、考えなくていいと思っていた。彼女が自分の意思で学校に引き返した可能性がないとは言わないけど、学校、自宅いずれの近くでも彼女の姿をみた人がいないわけだし、通学バッグは迫静香が届けたものと判明したら、もう、彼女が学校の外に出たと考える理由はないでしょ？ 羽鳥雅子はずっと学校のなかにいた——」

「そうは言っても、四時半に迫静香が彼女を探そうとしたときにも、五時に樫村文江が校内を見まわったときにも、生徒は誰もいなかったら？」

「そうだよ。すべての教室を見まわって、誰もいないことを確認したという樫村さんの言葉は無視できないわ。真っ暗やみで、じっと息をひそめて隠れていたのじゃないかぎり、樫村さんが気がつかないはずはなかった」

「じゃあ、だめじゃないか」

「ううん、そうじゃない。そこで気がついたの。樫村さんは言いました。『暗闇でじっとしている以外になにができるさね。』—— 答は、なにもできない。だから、暗闇で、見つからない場所で、じっとしていたにちがいないんです。午後七時までずっと」

「まさか！ 真っ暗な夜の学校で待ちあわせなんて、あり得ないと言ったじゃないか」

「待ちあわせじゃないわ。自由を奪われて監禁されていたの」

「なんのために？」

「それはちよつと待って。先に場所を考えてみましょう。求められる条件はなに？」

「学校に残っている教職員を見つからずにすむ場所だ」

「もちろんそうだけど、おなじくらいに大切なことがある。それはね、C校舎の屋上から落とすために手間がかからないこと。だって、そうでしょう？ 自由を奪ったといっても人間ひとり、C校舎の屋上まで運ぶのは簡単ではないわ。もたもたしていたら誰かに見ら

れるかもしれない。——だから、できるだけ屋上の近くに監禁しておきたかったはずじゃない。自分だったらどうするだろうって考えてみたら、たしかにあったわ、そういう場所が。それは、屋上出口の雑具置場にあった更衣ロッカー。あそこに閉じ込めておけば、羽鳥さんが声を出しても、まず、気づかれる心配はなかったでしょう」

「じゃあ、四時に美術室を出てすぐに誰かに襲われて、そのあと、C校舎屋上の更衣ロッカーに、延々と七時まで監禁されていたというのかい？　ちよっと信じられないな」

「でも、そうなんです。迫さんは、彼女が自分が一緒に帰ると言いだすのを怖れて、わざと通学バッグを残して帰ったのだと考えたみたい。そうじゃなかった。羽鳥さんは、校内である人物と会う約束があったから、そのあと、また美術室に戻ってくるつもりだったから持って行かなかったの。迫さんがついて来たら困るという頭もあったでしょうけど」

「その、ある人物というのが犯人かい？」

「もちろん。美術室があるB校舎で襲ったのでは、あとが迅速に動けないから、C校舎のどこかに呼び出したんだと思う。一番ありそうなのは、今わたしが使わせてもらっている相談室かな。部屋を出てすぐのところがエレベーターだし」

「しかし——もう一度訊くが——なんのために、七時まで待つ必要があったんだ？」

「はじめはね、暗くなるのを待っていたのかもしれないと思った。学校の屋上を見はっている人なんていないだろうけど、それでも屋外が暗いほうが安全なものね。——でも、それだつて五時を過ぎれば十分暗さでしょう。さらに二時間、七時まで待つことで、状況になんの変化があったかしら？　教職員が残っているのは一緒に、迫静香という生徒が帰っただけ。どう考えても、七時という時刻に特別な意味があったとは思えないの。ようするに、七時まで待ったのは、犯人の計画ではなくてアクシデントだったということ。もっと早い時間にやるつもりだったのに、不測の事態によって出来なかったんです」

「不測の事態って、なんだい？」

「小父さんも、よく知っていることなんだけどな。今回のことで、羽鳥雅子に関わった人物の身に起きた不測の事態といえ、ひとつしかない。それは、成瀬俊吾が交通事故を起こして足止めされたこと——」

「それはおかしいだろ！　成瀬は情報提供者だ。やつの行動によって犯人の計画が左右されたなんて、話があべこべじゃないか」

「成瀬はほんとうに情報提供者だった？　羽鳥さんが死んだ直後に手紙がきて、話を聞こうとしたら殺された——それだけでしょ。金曜日に現場を目撃したと書いてるけど、いつの金曜日？　現場ってどこ？　『瑞鳳高校を訪問して不穏なものに気づいた』とあるけど、それはひと月前の話だし、決定的な瞬間を目撃した『恐ろしい現場』が瑞鳳高校だとは書いていない。どうして、これが羽鳥雅子の死についての手紙だと言えるの？」

「手紙の筆跡は、間違いなく成瀬俊吾のものなんだよ」

「別人が書いたとは言っていない。でも、警察に送ってきたのは誰かしら？　封筒の表書きはパソコンで作った宛名シールだよ」

「じゃあ、誰かが、成瀬からもらった手紙を警察に転送したというのかい？　しかし、同封の写真というのは——」

「なにかの写真が同封されていたでしょうね。でも、今わたしたちの手元にある写真がそれだという保証はないわ。転送した人が、別の無害な写真と差し替えてしまった——さ

あ、さあ、小父さま、ここまで聞いて、この手紙は、最初に受けとった人にとって、どういう意味を持っていたと思う？　〃ことが重大なため、どのようにすべきか悩みました。学校に知らせるべきなのか、あるいはマスコミの手に委ねるべきなのか——？

「ゆすりか」

「そうでしょう。成瀬は、ひと月前に瑞鳳高校で——たぶん文化祭で、なにか、ゆすりのネタになりそうな材料に気がついて、そのあとずっと、決定的な場面を押さえてやろうと狙っていたのよ。想像だけど、男と女がよろしくやってる場面を見かけて、観察を続けていたらラブホテルに出入りする瞬間をキャッチできた——そんな感じじゃないな」

「それで、その証拠写真を同封して、取り引きに応じないかと言ってきたんだな。訴えられないように、わざと遠まわしな表現をつかったんだ」

「ところが、その手紙を受けとった人物は、たまたま、成瀬が羽鳥さんに近づいて、〃つきあってくれないと死んでしまうぞ〃という脅迫まがいの手紙を送っていた事実を知っていたの。本人から相談されたんでしょね。そこで、その人物は、成瀬を学校に呼び出して、彼が羽鳥さんと無理心中を図ったように見せかけようと考えたんです。まず、羽鳥さんに、成瀬に対して夕方にこっそりと学校に来てくれ——と返事をさせる」

「羽鳥雅子には、自分が一緒に会って成瀬を追い返してやる、とでも言ったんだらうな。しかし、彼女がそのことを誰かに話してしまったら、どうなる？　ぶちこわしだぞ」

「羽鳥さんという子はね、ものすごく自分に厳しくて、完全であるうとして他人に弱みを見せられない、そんな人だったんだよ。だから、かわいそうだけど、〃軽々しく男に連絡先を教えたのが悪い〃みたいに責めておけば、大丈夫だと計算できたんじゃないかな。」

さて、犯人は、C校舎の相談室で羽鳥さんを待ちうけて、殴って失神させたか、睡眠薬でも飲ませたか、それは今では分からないけど、いずれかの方法で抵抗できなくしたうえで、屋上に運んで更衣ロッカーに監禁しました。あとは、成瀬が来るのを待ち伏せて、おなじ手口で自由を奪って、羽鳥さんと一緒に屋上から落とすだけ。たぶん五時ごろの約束で呼んだんだと思うけど、肝心の彼は、交通事故で足止めされてしまった。成瀬にしてみれば、その日は女子高生相手のお遊びにすぎなかったし、車も使えなくなったから、もういいやと考えて、行くのをやめてしまったわけね。

さあ、困ったのは、羽鳥さんを監禁することで一線を越えてしまった犯人だよ。祈るような気持ちで成瀬を待ち続けたことでしょう。でも、六時になっても、七時になっても来なくて、ついに、あきらめざるを得なくなりました。でも、羽鳥さんをどうしよう？　もちろん、他日にやり直しというわけにはいかなくて、どうあってもその日に殺してしまう以外に選択肢がなかった。犯人はパニック状態だったでしょうね。飛びおり自殺に見えるかどうかなんて、考える余裕すらなくて、当初の予定どおりに、無我夢中で彼女をフェンス越しに投げ落とすのが精一杯だったでしょう。

でも、そのあとで犯人は思いついたの。自分には、羽鳥雅子を殺す動機がない。だから、羽鳥さんの不審な死に関連づけて、もともと自分が殺したかった成瀬俊吾を、当局に情報提供しようとする人物として登場させて殺せば、自分は安全じゃないか——ってね。成瀬が寄こした脅迫状を読み返してみれば、そのまま情報屋の手紙に転用できそうだし、なんといつても成瀬本人が書いた手紙なんだから、本物らしいでしょう。そこで、自分が学校で撮っていた写真のなかから、羽鳥さんが写っているものを適当に選んで、一緒に新し

い封筒に入れて警察に送ったわけ。もちろん、手紙が届くよりも先に、今度は自分で、金を払うからといって成瀬を多摩川に呼び出して、殺してしまったのよ」

「だが……しかし、そんなずさんな計画がうまくいったはずがない。最初の計画どおりに実行していたら、それこそ、間違いなく変死体だ。解剖すれば、事前に殴られた痕跡や睡眠薬は必ず見つかる。無理心中で決着なんて、あり得ないよ」

「解剖すれば必ず見つかるといっても、解剖する割合自体が数パーセントじゃね、はたして小父さんが考えたとおりになったかどうか。今回だって、犯人は、羽鳥さんの死が、あまりに簡単に飛びおり自殺ですまされてしまって、内心とまどったと思うよ。成瀬の手紙をぶつけても、もとの事件がただの自殺じゃあ効果がないものね」

小父さまは不機嫌そうに黙り込んでしまった。

「羽鳥さんの死について多くの人の気持ちを聴いたわ。感じていることは人それぞれで、適切に対処できなかった悔恨や、かけがえのないものをなくした喪失感や、彼女を死なせたものへの腹立ちや——それらは、警察が形式ばって質問しても、ぜったいに表には出て来ない。相手の気持ちに寄りそって、悲しみや怒りをありのままに受けとめて、こぼれ出てきた感情に焦点をあてて、彼ら自身に気づかせてあげること、ますますそれが強化されて、ついには、事実ではなくて感情が物語を支配するようになる。そうするとね、もう、特定の事実を意識的に隠すことなんて出来なくなってしまうんだよ。」

その結果、わたしは、それぞれの物語のあいだに、小さな、だけでも決定的な矛盾を見つけた。羽鳥さんが倒れているのが見つかったとき、細倉先生と榎村さんは、どちらも混乱してしまって、近づいて介抱するどころではなかったそうです。榎村さんに呼ばれて岩沼先生が駆けつけたけど、暗すぎて、顔も汚れていたことから、それが誰だか確認できないまま、とにかく、警察や他の先生に連絡をしようということになった。岩沼先生と細倉先生が手分けして各方面に電話をかけた。警察と救急車を呼んだのは岩沼先生で、教職員に電話をかけるのが細倉先生の役目だった。ところが、細倉先生が最初に校長先生にかけようとした矢先に、羽鳥さんのお母さまから電話が入ったそうです。そのときのことについて、お母さまは、何時ごろ学校を出たかと訊いたのに「死にました」と言われて、意味が分からなかったと話していました。——おかしいよね。岩沼先生は、警察が到着して死体を確認したときに、はじめてそれが羽鳥雅子だと分かったと言っているのに、その前にお母さまの電話を受けた細倉先生は、どうして死んだのが雅子さんだったと答えられたのかしら。言うまでもなく、彼女が自分で羽鳥さんを投げ落としたからよ。死体を見て腰を抜かしたのは、芝居ではなくて、犯行時には荷物を投げ出すような気分で、殺したという実感がなかったのね。こわれていたんだよ、あの先生は」

警察がそのことを立証できるか、それは、わたしには分からない。とにかく、どうしようもなく気分が重かった。彼女の醜聞相手が岩沼先生でなかったと信じたい——そうでなければ、もう、永久にあの懐かしい母校に帰れない、と思った。